

2019.9

秋冬

No.109

思文閣出版

鴨東通信



◆ 日常語のなかの歴史 22
わふく【和服】

◆ 岩本真一

◆ てーたいむ

寺院遺跡からよみとく列島の古代

◆ 菱田哲郎 ◆ 吉川真司

即位礼の装束

◆ 佐野真人

木がない島の環境史とコロニアリズム

◆ 米家泰作

エッセイ

トプカプ宮殿の魅力

◆ ヤマシラール水野美奈子

賀茂信仰における忌子

◆ 森本ちづる

◆ リレー連載(3) 先読み！二〇三〇年の人文科学

「あの子を解き放て！」

あの子は、公共財だぞ！」

◆ 福島幸宏

◆ 史料探訪 70

国際商品へと展開した御用陶器

◆ 薩摩錦手——薩摩焼の明治維新—— ◆ 深港恭子

菱田哲郎（京都府立大学教授）
吉川真司（京都大学教授） 編

古代寺院史の研究

8月刊行

B5判上製・五二二頁／本体 一三、〇〇〇円

【目次】

序 論 菱田哲郎 吉川真司

●寺院の変遷とその荘厳

堂内荘嚴の考古学―緑袖波紋埴と埴仏から（大庭暎）

三彩・緑袖埴再論（高橋照彦）

日本古代寺院における「幢」の考古学的研究（高正龍）

古代寺院の教的変遷（吉川真司）

常修多羅乘成立をめぐる基礎的考察

―大寺を支える僧侶組織―（堀裕）

●山城国

高麗寺からみた日本古代の仏教（菱田哲郎）

古代・中世寺院史研究における東安寺の射程

―京都市伏見区の小野廃寺について―（黒羽亮太）

平安京の周辺諸寺園（古岡正浩）

造仏の場としての法成寺の意義（根立研介）

〔ラム〕 櫻原廃寺（堀大輔）

〔ラム〕 宝菩提院廃寺（梅本康広）

〔ラム〕 神雄寺跡（天坪州一郎）

古代寺院遺跡について、実地に
検討をおこない、様々な分野を越
えて議論できる場を設けようと、
『古代寺院史研究会』は発足した。
本書は、主にその参加者が執筆し
た、畿内・周辺地域の古代寺院に
関する論考と最新の調査知見、さ
らに古代朝鮮・中国の寺院研究を
収録し、分野横断的な視点で古代
寺院史研究の新天地を拓く。

●大和国

高市大寺の所在地をめぐって（小澤毅）

香山堂再考（平松良順）

東大寺法華堂伝来の天平期諸像に関する一考察（藤岡雄）

〔ラム〕 尼寺廃寺（山下隆次）

〔ラム〕 安倍寺跡（丹羽恵二）

〔ラム〕 奥山廃寺跡（宮本正二）

●河内国

古代寺院と寺辺の景観

―河内九頭神廃寺周辺の調査成果から―（西田敏秀）

交野ヶ原の歴史地理―北河内の寺院を結び、上杉和央

生駒西麓の古代寺院の研究

―河内寺廃寺跡と法通寺跡を中心に―（網伸也）

河内六寺と知識（安村俊史）

〔ラム〕 河内九頭神廃寺（西田敏秀）

〔ラム〕 百濟寺跡（天竹弘之）

〔ラム〕 高宮廃寺跡（丸山香代）

〔ラム〕 河内寺廃寺跡（仲林篤史）

古代寺院史の研究

菱田哲郎・吉川真司



●行基寺院

行基建立の四十九院と開発（近藤康司）

山背の行基寺院―紀伊郡域を中心に―（吉野秋）

摂津国西成郡津守村の行基寺院（西本昌弘）

〔ラム〕 おうせんどう廃寺・がんせんどう廃寺（堀大輔）

〔ラム〕 山崎廃寺（山崎院）（古岡正浩）

〔ラム〕 大野寺跡（土塔）（近藤康司）

●地方寺院の諸相

地方寺院の法会―伽藍配置・仏像・経典―（舟橋乙）

飛騨における軒瓦の一樣相（三好清恵）

古代若狹における寺院造営の一樣相

―興道寺廃寺を中心に―（松葉竜司）

〔ラム〕 伊丹廃寺跡（中野明日香）

〔ラム〕 海会寺跡（近藤康司）

●中国と朝鮮

中国における双塔伽藍の成立と展開（向井佑介）

百濟寺院の立地―谷に造営された寺々―（清水昭博）

新羅王京寺院の伽藍配置について（田中俊明）

新羅下代景文王の宗廟祭祀と崇禰寺（井上直樹）

日常語のなかで、

歴史的語源や

エピソードを取り上げ、

研究者が専門的視野から

ご紹介します。

日常語の なかの歴史 22

わふく

和服

今の日本で和服という言葉が日常語かどうかは微妙である。私は大学生だった一九九〇年頃、大阪市

内で恋人を連れだした中学校の同級生とバツタリ出合った。買物帰りだという。二人の持った袋は大きくて柔らかさそうなで服だとわかった。「何買ったん、洋服？」と尋ねたら、「洋服って……」と爆笑された。わざわざ「洋」と付けたことが恥ずかしくなった。このとき私は洋服が死語になったと同時に服という言葉で一般化し、他方の和服も

死語になったと思った。

国立国会図書館デジタルコレクションによると、和服という言葉が目次レベルで初めて登場するのは石

井郁太郎『衣服裁縫の教——日本西洋——』（秩山堂一八八三年）である。和服とは前方開放衣全般を指すものであり、私が『近代日本の衣服産業』に取りあげた帯締め武道着のような、ゆったりした着物も和服の一種である。前近代和服はこのような武道着や男性用浴衣をはじめとして、ゆとりを残して着るものが多かった。

ところが二〇世紀になり、和服の持つ意味が一

世紀までとは大きく違ってきた。

例えば一九二〇年代は和服が最も流行した時期のひとつだが、出回ったのは銘仙という格安の絹織物であり、それは伝統衣装の継統とは程遠いものであった。この頃から和服は体に密着させて締めるものとなり、それは特に胸のほだけ具合に顕著に表れた。胸元のゆとりは、授乳のしやすさを考慮した女性の知恵であったのに、二〇世紀和服はそれをゆとりとともに失ってしまった。二〇世紀転換期に旗袍、漢服、チヨゴリ、アオザイも同じ運命をたどった。

いま、「和服」という言葉は和文化的見直しの兆しとともに復興し、最近では外国人観光客たちが喜んで京都で和服という「伝統衣装」を撮影している。けれども二〇世紀和服ばかりを日本人は和文文化ととらえ、そのように外国人に理解させている。作られた伝統が今や唯一の伝統であるかのように、日本人はゆとりを失っている。

（岩本真一・大阪市立大学経済学部特任助教、

同志社大学経済学部嘱託講師ほか）

ていーたいむ

寺院遺跡からよみとく

列島の古代

菱田 哲郎

(京都府立大学文学部教授)

吉川 真司

(京都大学大学院文学研究科教授)

近畿地方とその周辺、さらに中国・朝鮮半島の古代寺院に関する論考と寺院紹介のコラムを収録した『古代寺院史の研究』が刊行されます。考古学・文献史学という、編者のお二人それぞれの立場から、古代寺院史研究の魅力などをうかがえます。

■お寺は古代史好きを育む

—— まずは、そもそも古代寺院史の研究をなぜするのか、研究をする意義から教えてください。

菱田●考古学の面からいえば、寺院は遺跡の豊富さが特色です。日本列島ほどの郡にも寺があつて、平安時代になれば東北地方北部にもあります。寺院を通して日本史を組み立てるといふ、研究素材としての魅力があります。地域比較に便利なツールなのです。

—— 文献史学の立場からはいかがですか。

吉川●研究の意義の前に、面白さということ言えば、お寺は古代史好きを育むと思います。美しい仏像とか、巨大な建築とか、そういうものを見て古代史に魅かれた人は多いのではないのでしょうか。中世史や近世史の場合は、大河ドラマが入口なのかもしれないが、寺院遺跡で古代の瓦や須恵器を拾って、考古学少年になつてしまう人もいますしね。

菱田●考古学の場合は、古墳がその役割かも知れません。「横穴式石室に入った！」とかね。廃寺跡には礎石くらいしかないです。吉川●そうかあ。ただね、子どもって物が落ちていたらうれしいじゃないですか。物が落ちているのは縄文・弥生時代の遺跡か寺院跡でしょう。わたし自身もそうでしたが、そこからはじまつて、

のちに古代史に進む人もいるし、考古学や建築、美術の分野に行く人もいる。古いお寺や寺院遺跡はダイレクトに古代を感じられる場所なんですよ。

研究面では、私の専門は律令体制ですが、当時のイデオロギーは儒教と仏教の二本立てで、それぞれに対応する組織が官僚機構と仏教教団です。わたしはもともと官僚機構を研究していたのですが、仏教教団をみるとまた違った古代の姿が見えてきました。律令などの法制史料から見えてくる古代の姿は一面的で、『日本靈異記』に描かれたような世界こそが、本当の古代なんだという考え方があるくらいです。律令条文ではわからない、生き生きとした古代が見えてくるというのが、寺院史研究の魅力であり、意義だろーと思えます。

—— **いわゆる仏教史とはまた違うところに関心があるわけですね**
吉川.. そう、社会集団論です。中世の黒田俊雄の寺院史研究は全体史としての寺院史でした。中世を形作る諸勢力のひとつとして寺社勢力の生態を明らかにする、そうすることで中世がよりわかるという。古代史でもそういう議論ができるだろーと思えます。

菱田.. ローカルな各地の寺は地域社会を考える材料になります。古墳から寺院へという言葉があって、古墳時代の社会は有力者の古墳から見えてきますが、のちには寺院が地域社会の核をあぶりだすツールになります。もの言わぬ考古資料からそれぞれの地域社会が見えて、中央だけでない広い地域の歴史をつくれます。

吉川.. たとえば瓦の研究からは、文献からは見えない寺と寺の関係、地域間の結びつきがみえてきます。

菱田.. 文献から見えてくる中央のあり方も面白いけれど、文献からは見えてこない地方のあり方を語れるのも面白さです。

■遺跡・遺物・議論 三本立ての研究会

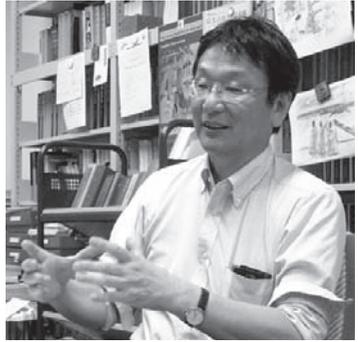
—— 本書の基になった古代寺院史研究会についてお聞きます。そもそも何を指して始められたのでしょうか。

菱田.. 遺跡になっていく寺跡というのはすごくたくさんあります。そういう寺の研究を考古の研究者はハードウェアに偏ってする傾向があって、本来そこで行われた宗教行事とか、そこにいた僧侶の存在とかがほったらかしになるくらいがあります。そこでせっかく資料があるのだから、いろいろな分野の人と研究を実地にしたら面白いのではないかと考えたのです。文献・考古・美術・建築などのさまざまに声をかけました。やってみると、それぞれ視点が違うので発見が多くてやはり面白い。毎回一つの地域について考えていって、もう次回で五二回目を迎えます。

吉川.. いつも、現地の調査機関の方々のお世話になっています。実際に発掘調査してこられた方に最新の成果を教えてください、私たちも自分で考えてきたことを報告して、意見交換をします。

菱田.. 各自自治体には文化財の専門家が配置されていて、寺院遺跡の調査も彼らが担当しておられます。そういう方にお話を聞き、さらにそれをもとにいろいろな視点から議論を広げていくわけです。

吉川.. 現地を案内してもらえるのに加えて、資料を出してもらえるのがありがたい。午前中はその地域を見てまわって遺跡をしっかり教えてもらう。午後は博物館などで、研究会の前に出土した



菱田氏

瓦や土器を見せてもらう。現場の見学、遺物の熟覧、それから議論という三本立てでやっています。

菱田.. 遺跡の調査は実際に掘っているときにしか聞けないことも多いし、報告書だけ見てもピンとこないこともある。現地ですでに埋まっている

たり、なくなっていたりもします。でも掘った方にそこへ連れて行っていただいて話をきくと、かなりの復元ができます。

吉川.. この家のあたりが金堂の跡です、と聞くとそうか!と思う。**菱田**.. いまは住宅街になってなんの片鱗もなくても、話を聞いていると塔がよきによきと建って古代の姿が復元されていくような、そういう体験ができて楽しいです。

吉川.. そうやっている、研究者同士のネットワークができてきて、そのなかでまた情報が入ってくる。面白い発掘調査についての情報交換の場になっています。次の例会の場所も、それを聞いて決めることが多いですね。

菱田.. 研究会のかんりの参加者がこの論集に関わっていますので、研究会のエッセンスも感じていただけたらと思います。

■地域間で比較する

—— 一方で、菱田先生が代表の科研でも寺院史研究をされています。そちらのねらいも聞かせてください。

菱田.. 実際に古代寺院でどんなことをやっていたのかということ、研究チームを作って解決したい、というのが目的の一つでした。とくにやりたかったのは海外との比較で、韓国の寺院にもたくさん資料があることは知っていたので、それも現地に行って教えてもらいたいというのがありました。また研究会は近畿地方のみでしたが、科研によって日本国内でも東北などに行けるようになり、比較をテーマにしながらかお寺の在り方を検討できるようになりました。

吉川.. 科研と研究会の中心メンバーはわりと重なっていて、ほぼ同じメンバーで東北、飛驒、若狭、讃岐などに行きました。

—— やはり畿内とほかの地域では違いますか？

菱田.. たとえば東北は古代にはいわばフロンティアなわけですが、でもそういうところにもお寺を造っていったというのが、まず面白いところ。大崎平野の北側が境界だった時に、その南側までは仏教寺院で埋め尽くすというのが奈良時代のあり方で、そこには律令国家のしつこさみたいなものを感じます。

吉川.. 地域差で面白かったのは飛驒。すごい山奥に立派な寺院の遺跡がある。飛驒には飛驒の匠がいて、凄腕の大工さんが造ったという説があるのだけれど、実態はわかっていません。

菱田.. 全国にあまねく寺はあるのだけれど、その在り方にはすごく濃淡があつて、こぞつてお寺を立てているところもあれば、有力

者しか建てていない場所もある。列島内の温度差も寺院の遺跡からは感じます。この差は単に経済力や信心深さの問題ではないと思うのですよね……。

吉川…うん、違うと思うな。文化力やろね。

大化の改新のあと、全国に評が五〇〇〜六〇〇できて、白鳳寺院も同じくらいの数ができるのですが、この分布が偏っているのです。「一郡一寺」とかいうのですけど実は違って、平均したらそれくらいになるといっただけ。「あまねくやっています」というのは官僚制の世界。それとは別の仏教の世界があるのです。

——海外との比較はどうでしょうか。

菱田…韓国では資料が多く出ているのが高麗時代の寺院で、日本の場合とは少し時代が違うのですが、むこうでは宿泊施設として使う寺院の例が多くあって、それが日本ではどうだったかという点など、今後日本と比較すべき宿題がいくつかできてきました。

吉川…円仁『入唐求法巡

礼行記』によると、中国の五台山へ向かう道々には旅籠みたいなお寺があったようで、高麗にも同様のお寺がありました。

菱田…『日本靈異記』にお寺に泊まっている人の話はでてくるよね。

吉川…そう、たしかに泊

っている人はいます。それから木津に泉橋寺というのがあって、そこには『蜻蛉日記』の作者が泊っているのだけれど、ただ、「泊まることもできる」というだけで日本の場合には泊まるための施設ではない。

——中国や高麗の事例は宿泊施設としての性格が強いのですね。

吉川…はい。なぜでしょうね。儲かるのかな？

菱田…経営的な観点はあるのでしょうかね。

吉川…ただし、五台山周辺のことは円仁が記録を残しているからたまたまよくわかるのです。あとの寺はどうかと言うと、まだまだわからない点が多いです。海外との比較研究はこれからの大きな課題ですね。

■注目すべき研究動向

——論集の「序」ではお二人に古代寺院史研究の「回顧と展望」的な文章を書いていただきました。

吉川…わたしは「仏教史」ではなく「寺院」そのものを見ようという関心から、史料の開拓が進んだ点をあげました。いくつか紹介すると、ひとつは出土文字史料です。木簡とか、墨書土器とか、瓦に書いた文字とか、その活用が最近かなり進んでいます。それから、『日本靈異記』のような説話史料。説話というのは説教に使うものですから、まったくの絵空事ではなく、全部ではないけれどかなり実態を反映している。それを積極的に使おうという動向がこの二〇〜三〇年の間に盛んになったと思います。

あとは中世史料です。中世の寺院運営の史料を古代にもってき



吉川氏

たらどうなるかということです。中世の中に古代が残っているということ掘裕さんなどが指摘したわけですが、それはいい方法だと思えます。史料的な限界を広げるだけではなくて、寺院を古代から中世まで時代を通してみていくことでもあります。

もうひとつは先ほど触れた海外史料。これはこれから開拓されていったら面白いだろうと思います。

——**考古学の立場からはどうですか。**

菱田…従来からの研究ももちろんよりきめ細かくなっているのですが、加えて主要な堂塔ではない僧侶のための僧房や大衆院だいしゅういん（寺院の賄いをする厨房）など寺院経営に関わるバックグラウンドの施設についてかなり分かってきたことは、注目すべき点です。長く存続している寺は大なり小なりそういうのを持っていた。

また従来は瓦ばかりに注目が集まっていたのですが、それ以外のいろいろな遺物にも目が届くようになって、堂内で行われた法会や供養の実態とか、堂内荘厳にまで考古資料から迫れるようになったことも挙げられます。

たとえば、いままでは単なる柱の痕跡と思われていたものが、宝幢ほうどうとか幢幡どうばんとよばれる一对の旗竿の柱跡ではないかと指摘されたのも興味深い成果です。これなどは吉川さんが長岡宮の宝幢の遺構を絵図と遺構から見出したことなどがきっかけで、同様の遺構が寺院にもあるぞ、ということになって見直しが進みました。あと韓国では柱が石造で残っているので、日本の場合はそれを木に置き換えて考えれば間違いないだろうということになったのです。これからはより一層、文献史学との対話も必要になってきます。

吉川…むかしは寺院遺跡というと伽藍配置と瓦だけだったけど変わってきましたね。

菱田…瓦が落ちていてこそ寺院だったというのが、私たちが勉強し始めたころの寺院史だったので、吉川さんなど文献の分野からの鋭いつっこみをいただいで、瓦を持たないお寺をちゃんと評価しないといけないことがわかってきました。山寺とかはたいていそうですね。それによって古代寺院のイメージがかなり変わってきました。

吉川…研究会の考古学の人はいわゆる瓦の専門家なので、それを指摘するのは、かなり勇気がいりました。瓦の出土数だけ見ていると古代寺院は消滅していくことになるのだけれど、瓦のない寺院があるということになると話はまったく変わってきます。

■寺院遺跡の復元・整備をめぐる

——**各地で進む復元・整備について考えることはありますか。**

菱田…研究史から言うと、まず昭和四〇年代が第一期の整備の時期なのですが、そのころは主要な堂塔さえ分かればいいというスタンスで、発掘が一、二年で、その翌年からすぐ整備にとりかかるのが普通でした。でもやはりそれは性急すぎたと誰もが思っていて、二一世紀になってからはそのやり直しが各地で行われています。今だと四、五年は調査をして、それから計画を立てて整備を始めるので、すごく緻密ですし、時間をかけています。

吉川…当時は高度経済成長期で忙しかったのでしょね。でもじつは今の時代の復元も一長一短あるなと思うことがあって、あま

りきれいに整備されてしまうと、そういう遺跡からは、考古学少年や古代史少女がなかなか育たないかもしれない、と思うのです。行政の立場で遺跡の活用とかわかりやすさを考えると、そうせざるを得ないというのもわかるのですが……。

菱田・古代の寺院遺跡の場合は元に戻すと、礎石があるくらいなので無機質になりがちで、憩いの場になりにくいのも難点です。

吉川・もつと雰囲気のある、古代を身近に感じられる復元ができればいいですね。具体的にどうしたらいいのかは、わたしにもわからないのですが、別の問題として、金堂や塔は基壇を復元したり礎石を置き直したり、あるいはレプリカを作ったりすればよくわかるのですが、先ほど出てきた実務組織に関する施設はどう復元すればいいのでしょうか。復元したとしても質素な板屋しか立たないから、長持ちもしないし顧みられない。でも、木簡とか墨書土器ってそういうところから出るのですよ。人が具体的な実務をしていたところだから。お寺のいろいろな機能がわかってくと、残すべき場所も増えてきます。

菱田・整備に関して言うともまだまだこれからですが、そのための調査はきめ細やかに行われて情報も増えていきますから、それをどう見せていくかが課題です。最近だと、遺跡自体はあまり作りこまずに、ARやVRでその上に復元した姿を見せる、というのがあります。河内寺麿寺跡などでやっていて、発掘時の姿も復元時の姿もわかるのでかなり有力なやり方になるのではないかな。

それから大野寺で復元した土塔は地域のシンボルになっていきます。子どもも遊べて、地域でも受け入れられていて、かつ古代を

感じられる。

吉川・市民が親しみをもつて行きたくなるようなところになるといいね。

■寺院は地域をよみとくツール

——本書を編んで見えてきた課題と展望をおうかがいます。

吉川・今回の論集は畿内という古代において重要だった地域を選んだわけですが、やはり列島のほかの地域との比較もつと必要です。九州や関東で同様な研究成果がでてきたら、大きな地域性が見えてくだろうと思います。古代の寺院そのものに関する文献史料なんて、ほんの限られたものですから、文献史学は「地域」のなかで寺院を考えるしかない。それぞれの地域を綿密に見ている、そのなかでの寺院の位置づけを考えるのはこれからです。

菱田・各自治体が行政単位で調査をするとひとつのエリア内で完結してしまうので、それを越えていくことが必要で、そういう役割を古代寺院史研究会は持っていると思います。

畿内のなかでも少し地域が違うだけでいぶん違う要素が見えてくることもあります。まだまだ掘り下げていくべきことはずいぶんあるという印象を持っています。

寺院はそれぞれの地域を読み解くツールになるということが今回の本で分かってきました。本書は近畿地方をサンプルにしているのですが、寺院をツールに地域を見ていくという手法はほかの地域にもひろげていけるのではないのでしょうか。

即位礼の装束

佐野真人

五月一日に天皇陛下が御即位になり、平成三十一年は令和元年と改元されて数ヶ月が経った。今回は二〇二年ぶりの譲位ということもあり、国内は祝賀ムードに包まれ、歓喜のうちに令和の時代がスタートしたことは、とても喜ばしいことである。

私が勤務する皇學館大学の佐川記念神道博物館では、天皇陛下御即位記念の特別展「即位礼と大嘗祭」を開催し、前期展では即位礼の歴史の変遷を解説した。その中で一般の方が一番驚いていたものが、即位礼に着用する装束の変化である。平成の「即位礼正殿の儀」の様子を思い浮かべ、平安時代から天皇が即位式で着用した装束は、「御束帯黄櫨染御袍」であろうという、先入観があるようだ。しかし、即位式において黄櫨染御袍を着用したのは、慶応四年（明治元年、一八六八）八月二十七日に挙行された明治天皇即位式からである。

平安時代の即位式は、朝堂院の大極殿において行われた。そして天皇は冕服（衮冕 十二章）を、皇太子以下の参列者は礼服を着用している。この冕服・礼服とは、唐風（中国風）の装束である。『養老衣服令』には、皇太子・親王・諸王・諸臣の礼服について規定

されている。また、天皇の装束に関する規定は律令の中には見られないが、『日本紀略』弘仁十一年（八二〇）二月一日条に記載された詔によつて窺い知ることができる。その詔によれば、大小の諸神事と毎年十二月に行われる荷前奉幣（天皇・皇后・皇族・有功の臣下の陵墓幣帛を奉る祭祀）には帛衣、元日の朝賀儀には衮冕十二章、毎月朔日に行われる祝告朔の儀、毎日早朝に政事を聴く朝政、蕃国（外国）の使節との謁見、その他の奉幣や諸節会には、黄櫨染の衣を着ることとされた。詔に規定された衮冕十二章の冕とは、玉繩を垂らした冕板を上部に付けた冠（冕冠）で、衮は袞竜・日・月下十二の文様（十二章）をつけた衣（袞衣）のことである。

弘仁十一年の詔には、天皇が衮冕十二章を着るのは元日の朝賀儀だけと規定しているが、『淳和天皇御即位記』には、「今皇帝（淳和天皇）、大極殿即位記。〔儀は元正に同じ。〕」、「皇帝、冕服を服し高座に就きたまふ」と記述されており、即位儀と元日の朝賀儀とは同じ儀礼構造を持つ儀式であることから、淳和天皇以降の即位儀と元日朝賀儀には、天皇が冕服を着用していたことは間違いないであろう。ただし、元日朝賀儀は、一条天皇の正暦四年（九三三

を最後に廃絶したので、天皇が冕服を着用する機会は、自身の即位式のみとなり、一世に一度のこととなった。そして、天皇が即位式で冕服を着用することは、幕末の孝明天皇即位式（弘化四年〔一八四七〕九月二十三日）まで続いてきた。ちなみに天皇が冕服を着用した初例は、天平四年（七三三）正月一日の朝賀儀に出御した聖武天皇であった。

即位礼の装束に大きな変化があったのは、明治天皇の即位式のときである。明治天皇は、父である孝明天皇の崩御により、慶応三年（一八六七）正月九日に踐祚せんその儀を行ったが、即位式は翌四年八月二十七日に京都御所の紫宸殿において挙行され、大嘗祭は明治四年（一八七三）十一月十七日に東京の皇居・吹上御苑において斎行された。この明治天皇の即位式・大嘗祭は、平安時代から続けられてきた儀礼の変革期であることに注意しなくてはならない。

『明治天皇紀』明治元年八月十七日条には、「令して古典に基づき大旌等の制を改め、九等官を以て旧参役と並立せしめ、中古以降用ゐし所の唐制礼服を廃す」とあるように、平安時代の『貞観儀式』が規定するような唐風の装束などが廃止されることが決定している。また、同八月二十七日条によれば、庭上には唐風の幡旗ではなく、紳に五色の布を垂らした幣旗が立てられ、紫宸殿の南階の前には、これまでの香炉にかわって地球儀がおかれた。同条に「新儀に依り従来すなわちの礼服を改めて束帯を装はせられ」とあるように、明治天皇は袞冕十二章ではなく、御束帯黄櫨染御袍を着用して出御したのである。

この明治天皇即位式が原型となり、明治二十二年（一八八九）の

『皇室典範』、同四十二年（一九〇九）の『登極令』と附式によって、近代の即位大礼の整備は一通り完成した。そして、旧『皇室典範』と『登極令』が廃止された状況で行われた平成の「即位の礼」は、内閣・宮内庁など関係省庁の慎重な審議のもとで現行法に抵触しないことを原則に、皇室の伝統と即位儀礼の根幹と構成要素を尊重して執り行われた。

平成の「即位の礼」では、これまで衣冠姿であった総理大臣の装束が、洋装（燕尾服）に改められた。海部俊樹元総理は、日本は新しい憲法になって生まれ変わったはずだから、国際社会から見て日本も変わったことが分かるように燕尾服で行ったと当時を回想している（時事ドットコムニュース、「平成と私」インタビュー、平成三十年五月配信）。

天皇が即位を内外に宣明する儀式である即位式は、平安時代から孝明天皇までは唐風（中国風）の装束であった。これは当時の先進国であった唐にならうことで、平安時代の人々が日本も一流の文明国であることを対外的に表明する決意が読み取れる。そして、明治天皇即位式以後は、唐風の冕服・礼服から束帯に、平成には総理大臣は燕尾服に改められるなど、それぞれの時代に適応した即位式が行われてきた。平成の映像を見返しても、あまり違和感を持つことはない。これは、伝統を尊重しつつも、新儀を取り入れ、それも将来的には伝統としてしまう日本文化の特色なのかもしれない。

木がない島の環境史とコロナリズム

米家泰作こめ たいさく

澎湖^{ポッシュ}という台湾海峡の島々を筆者が初めて意識したのは、本多静六『日本森林植物帯論』（一九〇〇年）を読んだ時だった。この書は、近代日本の林学を築いた本多静六（一八六六―一九五二年）の博士論文で、気候に応じて形成された森林植生とその地域区分を論じている。そのなかで澎湖諸島は熱帯森林帯として記述されているのだが、奇妙なことに、

森林なるものゝ存することなく随て之が状態を記載すべき材料あることなし

と述べられている。樹木がなく、記すべき事柄もないのに、あえて触れるのだという。小さな島も欠かさず網羅するために、やむなく言及しているのではない。本多の論理によれば、澎湖諸島の本来あるべき森林植生がどのようなものであったかは、気候から推定できるという。その再生の方策も具体的に示すことができるという趣旨で、とくに論及しているのである。

本多がいつ澎湖諸島を訪れたのかは明記されていないが、「余の観察該島〔注・澎湖本島〕に限られたりし」と述べているので、実際に島に渡ったことは間違いない。本多は、明治二十九年（一八

九〇）に台湾の高地で調査登山を行っているので、この時に台湾から渡ったのだろうか。澎湖諸島は日清戦争の戦場の一つであり、日本の戦勝後、台湾とともに日本に割譲された。本多が渡航したと思われるのは、その翌年である。

旧記類によれば、かつて澎湖諸島には樹林があったとみられるものの、中国本土からの移民が「森林を濫伐」して、「全土荒漠たる状態」になった、と本多は考えた。木がないのは「強風の為め」だと言われているが、実際にはそうではなく、小さな島で森林資源の採取が過度に進んだためだろう、と本多は疑問を投げかける。つまり、人為的な森林破壊が破局的に進み、もはや樹木の再生が望めないような状態に陥った、というわけである。そう本多が確信する理由は、熱帯林が成立可能な気候である以上、森林が形成されていたはずだ、という点にあった。

こうした澎湖諸島のありさまは、森林が人為的な理由で失われたとされるイースター島を連想させてくれる。イースター島の森林破壊については、さまざまな説が出されているが、移住してきたポリネシア系の人々による伐採や、彼らが持ち込んだ動物に原

因があると思われる。島という限られた空間のなかで、人が環境に強くかかわり、破局を迎えた実例として、イースター島は引き合いにだされることが多い。本多が捉えた澎湖諸島も、まさにそのような例に見える。

しかし一方で、植物学と人類学の領域で知られる田代安定たしろやすだち（一八五七—一九二八年）が、日清戦争時に澎湖諸島に上陸し、本多に先駆けて植物調査を行っている。台湾総督府の技師となった田代は、澎湖諸島では「風害強烈」のために森林が発達しなかったとしても、植林を献策した（『台湾総督府民政局殖産部報文』一八九六年）。本多が台湾に渡航したのはちょうどその頃であり、総督府に協力を求めた際、おそらく田代の調査や主張に接しただろうと想像される。しかし、原因を強風に求める説に対して、本多ははっきりと人為説を称え、かつて樹林が繁茂していたと想定したことになる。いつてみれば、本多の所説は、近代の植民地台湾で、小さな島々を舞台とした環境史論争を引き起こそうとするものであった。

とはいえ、いずれの立場も澎湖諸島への植林を提唱するものであり、台湾総督府も植樹を課題とし、苗圃ひょうぼ（苗を育てるための畑）の設置や保安林の設定を進めた。総督府としては田代の立場を継承し、本多のように過去の「樹木ノ繁茂ヲ即断スル論者」に反論している（総督府殖産局『澎湖島之造林』一九一五年）。しかしながら、どちらの説が正しいのかは限られた史料からは判断がつかず、その後も両説に従う文献がそれぞれ散見される状況が続いた。また植林自体も順調には進まず、領有から五〇年近く経った一九四二年になっても、「何故未だに緑化が出来ないのか」と嘆かれていた（永

田節男「澎湖島の緑化」『台湾の山林』一九七、一九四二年。

こうした経緯を今振り返ってみると、本多の説がどれほど正しかったのか、評価は難しい。本多は台湾の高地で調査登山を行った際、先住民が野火や焼畑を繰り返さずまを目撃して、気候に応じた本来の植生が失われ、樹木に乏しい草原や耐火性のある樹種からなる二次的な植生へと改変されたと考えた。この「本来の植生とその人為的改変」というロジックを澎湖諸島に当てはめると、先住の中国人移民が森林を破壊し、植生を破局に導いたという環境史が、想定できることになる。ただし、そのことを本多は丁寧に実証したわけではなく、演繹的に論じてみせたに過ぎない、というべきだろう。しかしながら現実の植民地統治において、本多の議論は、森林の保全や形成を進める日本のコロニアリズムを支えると同時に、環境に対する先住者の無為無策を批判的に対置する役割を果たしたことになる。

コロニアリズムという、今の私たちからみて肯定的には捉えがたい体制と、環境保全という現在においても重要な価値観は、互いに深くかかわり、ときに支えあってきた。本多はその鍵となる人物の一人であり、拙著『森と火の環境史』第Ⅱ部の焦点である。ただし右の澎湖諸島の環境史をめぐる問題は、拙著に積み残した課題である。引き続き、検討を進めていきたい。

（京都大学大学院准教授

米家泰作『森と火の環境史』

▼詳細28頁

トプカプ宮殿の魅力

オスマン帝国の首都イスタンブルに一四七八年に建設されたトプカプ宮殿は、帝国の政治・行政の場であると共に、君主スルタンの居城として栄えた。アジアの西端、ヨーロッパの東端に位置したオスマン帝国を治めた歴代スルタンは、領土を拡大しながら東西世界の覇者たることを公言した。したがってトプカプ宮殿から発信されたトルコの文化や芸術は、東西世界に影響を与えたと共に、一方でイスラーム世界、中国、ヨーロッパなどの諸文化圏からの要素を含んだ国際的な様相を呈した。今では世界の人々の花として愛されているチューリップ、憩いの場として現代社会に欠かさないカフェやその文化、健康志向の強い現代人の食材として定着したヨーグルトやその食文化、軍隊のマーチから変容してプラスチックバンド音楽となった軍楽の文化、これらはオスマン帝国から発信され、現代社会にまで浸透した文化の諸例である。

トプカプ宮殿は、トルコ共和国建国（一九二三年）の翌一九二四年に初代大統領アタチュルクによって博物館とされた。以後碩学または新進気鋭の研究者が館長を務め、ほぼ四〇〇年にわたりオスマン帝国の財宝を所有し、宮廷工房で製作された美術工芸品や

ヤマンラール水野美奈子

諸外国からの贈答品を所蔵する宮殿の博物館への転化と管理にあたった。一九七一年秋に留学生としてイスタンブルに渡った私がトプカプ宮殿を訪れた時、館長はケマル・チー博士であった。書誌学者であり博物館学にも精通し、トプカプ宮殿博物館の近代化に大きな業績を残した館長だったが、私が恐る恐る館長室を訪問すると穏やかな笑みをもって迎え、一介の留学生に色々な話をして下さり、この宮殿にはあなたのようなアジア美術の研究者も必要ですと述べられた。若輩の私にはトプカプ宮殿が所蔵する中国や日本の陶磁器のコレクションのことぐらいいしか頭に浮かばなかったが、その後トプカプ宮殿を訪れるにつけ、この宮殿に日本美術にも共通する様々な中国の文化のおよび美術的要素が潜んでいることに気づかされた。

中国の文化的・美術的要素がなぜトプカプ宮殿にたくさん潜んでいるのか、理由は大雑把には三つ挙げられる。一つは、イスラーム世界における中国美術工芸品への憧れである。イスラーム世界ではその初期から、支配者がステータス・シンボルとして所有することを望んだ三種の神器ともいえる製品があった。中国の紙、

中国の絹織物、中国の陶磁器である。オスマン帝国もイスラーム国家として例外ではなかった。二つ目の理由は一三世紀〜一六世紀、イスラーム世界が中国の元や明と行った交流・交易によって中国的文化や美術がイスラーム世界の美術工芸品にも反映され、その影響がオスマン帝国にも及んだことである。三つ目の理由は、オスマン帝国の人々が自分たちの民族のおよび文化的ルーツとして中央アジアの文化を大事に心に留めていたことである。この中央アジアの文化というのは、多分に中国文化の影響を受けていると考えられるが、トルコ人にとっては自分たちの文化として認識されているものである。

第一や第二の中国的要素は現存する事物や美術工芸品、あるいは文書資料などによってある程度確証が得られるが、第三の理由に関してはトルコ民族の精神的な認識に頼るところが大きいので、なかなか証明しにくいところがある。ただ文化史や美術史に携わっている者としては、この第三の理由がなかなか魅力的でもある。例えばトプカプ宮殿の壁面は美しいタイルによって裝飾されている。その多くは、宮廷工房の文様絵師たちが創作した蔓草文やオスマン人が好んだ写実的なチュリリップ、カーネーション、バラ、ヒヤシンス、満開の花木などから構成された特色のある文様で構成されている。しかしよく見ると瑞雲文、宝珠文、灵芝文、姫萱草文など様々な中国の吉祥文様が華やかなオスマン文様の中に取り込まれているのが分かる。皇子の生涯で最も重要な儀式である割礼が行われた部屋の入口壁面には、つがいの麒麟が描かれた大きな陶板も見られる。これらは王家の栄華、子孫繁栄、国家の安

泰、社会の安寧、無病息災、戦勝などを祈願したオスマン帝国の人々が、中央アジア時代から忘れることなく抱き続けた吉祥の伝統を形として表現したものに違いない。しかしこうした精神的な表象を裏付ける文献資料はなく、また伝承として継続してきた記録も存在しない。文様絵師たちが人知れず受け継いできたトルコ人の心に生きている古い伝統の表象としか説明できない。

私は現在、トプカプ宮殿が所蔵する詩画帳『サライ・アルバム』（二五世紀末にトルコ系王朝の白羊朝（二三七八〜一五〇八）で編纂）の研究をしており、ここに貼られている二〇〇〇点以上の書や絵画のカタログを製作し、出版に向けて準備中である。上に挙げた第二の理由で述べた中国との直接の交流や交易によって伝来した中国絵画やその画題、画法、風俗がイスラーム世界の画家たちによってイスラーム化していく過程が迫れる興味深い絵画が多く残されている詩画帳である。

トプカプ宮殿は、まさしくオスマン美術の宝庫そのものであるが、中国や日本が共有する美術的要素探しができる魅力的な宮殿でもある。

（国際トルコ美術史学会常任理事）

ジラルデッリ青木美由紀編著

『オスマン帝国と日本趣味／ジャポニスム』

A5判上製・三四〇頁／本体六、五〇〇円

▼詳細29頁

賀茂信仰における忌子

森本ちづる

上賀茂社には、忌子（いご・いみこ）と呼ばれる女性祀職が奉仕していた。忌子の文献上の初見は「延喜式」で、中世・近世の年中神事の記録にもその奉仕がみられ、史料での下限は管見の限りでは明治二年（一八六九）であるが、社家の世襲が廃止された明治四年に忌子の制度も廃絶したもののと思われる。

忌子の起源伝承としては、賀茂氏の系図にみられる上代の女性祀職である齋（い、いづ）祝子（むすこ）の後裔であるといわれる。齋祝子は玉依比売（たまよりひめ）の神話を継承する阿礼乎止売（あれはとめ）として祭祀をおこなったと伝えられている。

これまでの学説では、阿礼乎止売は神秘的な巫女の役割を以て御阿礼神事（みあれかみかみ）に奉仕したと考えられてきた。御阿礼神事とは、賀茂祭に先立ち、祭神降臨の地である神山（こうやま）から御阿礼所へ御神霊を迎え、上賀茂社神域への神幸をおこなう浄闇の秘儀である。この神事における阿礼乎止売をいには齋祝子が、のちには賀茂齋院がつとめ、齋院制度の廃絶後は忌子が再びその役割を担ったとされていた。しかし、御阿礼神事における阿礼乎止売の奉仕についての史料は現在確認できず、齋祝子や忌子および齋院の奉仕につ

いて考察することは困難である。齋院は賀茂祭に参向するが、御阿礼神事に奉仕したとはいえない。とはいうものの、これまでの先行研究は、齋院が御阿礼神事に奉仕したことを前提に忌子を齋院の代行者として位置づけており、物忌の童女として捉えられることはほとんどない。

忌子の補任方法等は明らかでないが、賀茂の氏人の女子から選ばれ、自宅の齋室に起居し、賀茂祭においては輿で二鳥居外まで参入し、輿を降りて後は下女に背負われて忌子殿に入った。忌子殿は、本殿にほど近いところに位置した忌子の候所で、中世の古絵図にも現在と同所にみられる。忌子は、御戸開神供奉獻では本殿東階下に祇候し、神田神事である土解祭・植御祭・御田刈神事に奉仕した。神の御側近く仕え奉り、稻霊を奉齋する奉仕のありかたには、後述する伊勢の神宮の子良や大嘗祭の造酒児の童女との共通性が見出され、神聖な童子女である物忌職の事例として位置づけることが出来る。

また、御阿礼神事はあらたな神の来臨、誕生であり、玉依比売の神話を祭祀のかたちにしたものといえるが、さらに御阿礼の意

味について考えるならば、稲は神への捧げものであるとともに生命を繋ぐものであり、忌子が稲作儀礼に奉仕することは豊穡の願いを込める意義があると思われ、広い意味であらたな生命の誕生—みあれ—との関わりが意識されるということも出来よう。忌子は物忌の童女として解釈できる存在であるとともに、賀茂信仰の根幹である玉依比売の流れを汲む賀茂氏の神聖な童女なのである。賀茂信仰を背景にした時、そこを上賀茂社固有の信仰を投影された忌子の姿が浮かび上がるといえる。

なお、下鴨社の忌子については、それを考証する史料が少ないものの、忌子女^{いんめちやう}、屋や忌子の始祖を祀る社等、忌子の存在の重さを知り得る伝承が残されており、考慮するべきところである。

清らかな童子女が祭神の御側近く仕え奉る事例は、神宮においてきわめて重い職掌を以て奉仕した大物忌の子良に窺われるように、清浄を尊ぶ祭祀の古態を偲ばせるものである。子良の職掌には、神田での稲作りにあずかり、神饌を調備・奉奠し、遷宮の諸祭に奉仕する等、稲霊を奉齋し^{みやとこ}宮処を鎮祭する大嘗祭の造酒児の童女との共通性がみられ、さらに宮中祭祀における戸座や火炬の童子女の事例も考え合わせて、神聖な水と火をつかさどる奉仕者としての側面もみとめられる。また正殿御扉の御鍵を管理し、御扉開の手附初^{てつけはじめ}をおこなうことも、本来は心御柱を齋き奉ると捉えられることから、その職掌の重さとともに淵源の深さをも窺い知ることが出来る。

さらに「延喜式」「貞観儀式」等を繙くと、神宮の他に、春日・大原野・平野・梅宮・松尾・賀茂・香取・鹿島等の諸社に「物忌」

の祀職がみられ、本殿内陣への幣帛の出納や御饌を奉ること等に奉仕した事例が窺われる。しかしながら、これら物忌の童女に関する文献はあまりに少なく、明治四年までの確実な奉仕の記録がみられるのは、神宮と鹿島の二例のみであり、ここを上賀茂社の忌子も加えることが出来る。

この他にも諏訪上社の大祝や神使といった憑坐童に近い童子の祀職や、あるいはやや性質が異なるものの現在もその片鱗が窺われるものに、頭屋制祭祀における童子の頭人や祭礼稚児として神祭りに奉仕する事例等があげられるが、いずれにしても近代以前の神社祭祀において童子女が果たした役割は必ずしも小さなものではなく、そこに我々の先祖が抱いていた童子女へのまなざしをも垣間見る思いがする。こうした様々な要素を併せ持つ童子女の祀職について、その存在と意義を出来得る限り明らかにしたいと考えている。

(明治神宮百年誌編纂室)

橋本政宣宇野日出生編『賀茂信仰の歴史と文化』

A5判上製・二四〇頁／予価七、八〇〇円 ▼詳細24頁

「あの子を解き放て！」

「あの子は公共財だぞ！」

人文学の歴史は、資料と情報を解放し続ける歴史である。信仰や荘厳、権威のための作品、さらに正統性確保のための記録などは、リソースや権力が集中する組織で作られ、その権力のサークルの中で引き継がれながら、長く受け継がれてきた。しかし、近代革命以降、王家や貴族の財産が解放されて博物館が成立し、また「市民」自身が互助のために公共図書館を設立して以来、資料

や情報の中で、特に公共性の高いものは、今の所蔵者が政府・自治体・団体・個人のいずれであるに関係なく、また論理的には流通しているかどうかに関係なく、公共財として社会全体に拓ひろかれることが前提となった。そして現在では、いざとなれば社会全体で遣せるように、遅々とした歩みながらも制度整備が進んでいる。

こう大上段に書いてしまうと、諸氏には自分自身の生活や仕事に直接関係ないことと思われるかもしれない。しかし、一九九〇年代半ばに、月尾嘉男（東京大学名誉教授）が東京で「デジタルアーカイブ」という造語を作り、長尾真（元京都大学総長）が京都で「リアドネ」という挑戦的プロジェクトに着手してから四半世紀、表題の言葉は、個々の人文学関係者の覚悟を問う言葉として迫っている。そして、その焦点は、人文学がその営為の根拠としている

文書や記録類とその成果である論文や書籍、つまり資料と情報を、最新の技術を使ってどう社会と共有するか、にある。

まず、文書や記録類について述べてみよう。京都に、そして思文閣出版にも関わり、さらに全国的にも非常に注目された事例としては、筆者も京都府立総合資料館（当時）の担当として直接関わった「東寺百合文書WEB」 (<http://yakugo.kyoto.jp/>) の公開がある。これは当時エントリーしていたユネスコの「世界記憶遺産」(現在は「世界の記憶」と訳出)との関連もあって計画されたもので、京都府所蔵の東寺百合文書(国宝)の全点のデジタル化とWEB公開(約八四、〇〇〇画像)を二〇一四年三月に行ったものである。これが評価された点は、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスという世界的な権利表記の仕組みを適応して、京都府立総合資料館というクレジットをつければ、画像や記述のあらゆる形の活用を可能にしたことにあった。これは中世史研究者やIT技術者を中心に大きな反響を呼び、「東寺百合文書のウェブ公開の衝撃は大きく、オープンデータが一気に開花した」などの評価をいただき、Library of the Year 2014 大賞も受賞することとなった。以後、同様の取組は各地で続き、二〇一九年春には「我が国が保有する多

福島幸宏
（東京大学大学院情報学環）

様なコンテンツのメタデータをまとめて検索できる「国の分野横断統合ポータル」として、ジャパンサーチ (<https://jsearch.go.jp/>) の試行版が公開されるに至っている。

さらに、学術書を含む書籍や学会誌においても、前記の長尾真が国会図書館長に就任した二〇〇七年以降に大規模なデジタル化がすすめられ、現在二七〇万点弱の書籍や二〇〇〇年までの学会誌等について、電子データの作成と、様々な条件が付与されながらも、ウェブや図書館端末への公開が行われている。

しかし、このような状況にもかかわらず、特に歴史学と国文学の分野で、学術書と学会誌の電子化とオープン化は致命的に立ち遅れている。この要因は、版元においては、絶版の取り決めの不明瞭さや疑似著作権の主張、所有権と著作権の意図的なもしくは無知からくる混同が要因であろう。しかし、版元のパートナーであり、かつ版元に新しい情報をもたらすべき人文学の側にも大いに責任がある。また、直接に貴重な文書や記録を管理する人文学関係者が、単に自身知らない世界であるから、という理由でデジタル化に否定的な態度を取っている事例は枚挙に暇がない。

呑み屋に集まれば挨拶のように出る「学生がネットに出ている紀要論文しか引用しない」「要路の人や報道機関の人文学への理解が低い」「なんであんな俗流本ばかり書店で平積みなのか」「書棚の圧迫で家族に圧迫されている」などの愚痴は、我々自身の不作為が惹起した事態である。日々想定外のコンフリクトが生じるこの世界に人文学が貢献できることがあるとすれば、それはその主張のもとになる資料や、成果の最良の部分を、より手軽により

広い属性の人々に届けていくことであろう。

もちろん学会や出版社がバタバタ倒れるような状況は好ましくない。しかし、他分野や諸外国では、苦心しながらもいくつかの解決策が講じられている。すなわち学会誌の電子化とオープン化(場合によっては一定期間後の)、学術書の電子での配本、その前提としての編集と出版の分離や、フェアユース(教育・研究等の目的で適正に利用する場合の著作権制限規定、公共貸与権の設定などがそのメニュールである。もちろん、一朝一夕にすべての課題は達成できない。しかし個々の人文学関係者がすぐに取り組めることはいくつかある。可能な範囲の論考をクリエイティブ・commons・ライセンスの適用を宣言してアップロードする、研究グループで電子化やオープン化を版元と交渉する、所属機関所蔵資料のウェブへの公開を後押しする、などはすぐにも可能であろう。

このタイミングでこのような集団的・個人的な「構造改革」に踏み切らなければ、人文学とその関連の産業が二〇三〇年を笑顔で迎えられるか、非常に心もとない。人類は、作品や研究の創作・蓄積と解放の往還で社会全体を前進させてきた。そしてその往還は時代時代の最先端の技術をもって行われている。この営為は止めることはできない。そして自ら推進するための行動が、いま我々に求められている。二〇三〇年に至って、元ネタ(ものけ姫、一九七)が通じなくなっても、「あの子を解き放て、あの子は公、共財だぞ」と呼び続けたいといけないことは解(わか)っている。しかし、人文学がまだまだ元気で、さらに「あの子」の数がぐっと減っている、この台詞を笑顔で叫べることが、私の願いである。

国際商品へと展開した御用陶器 // 薩摩錦手 //

——薩摩焼の明治維新——

深港恭子

(鹿児島県歴史資料センター黎明館主任学芸専門員)

開国とともに幕を開けた国際交流の時代、薩摩焼は慶応三年（一八六七）の第二回パリ万博への出品をきっかけに、他の国内産地に先駆けて国際的評価を獲得し、海外への販路を開拓した。その後到来する薩摩焼の大輸出時代については、ご存知の方も多いたろう。

薩摩焼は今から四二〇年前に朝鮮人陶工によって創始された、旧薩摩藩領で育まれた焼物である。時代に沿って概観すると、初期には肩衝茶入に象徴される茶道具が隆盛する一方、民需品の黒薩摩の生産が始まった。続いて一六二〇年代頃までに白色陶器の白薩摩が誕生し御用品へと展開、一八世紀中頃には磁器生産が始まるものの、色彩と用途で対照をなす白薩摩と黒薩摩が藩の重要産品として発展を遂げた。江戸後期になると、白薩摩はさらに金彩と色絵の具で華麗な装飾が施された薩摩錦手へと展開した。

また、産地から見れば、朝鮮人陶工が作陶した地域によって豎野系、苗代川系、龍門司系が、その後、国内の製陶技術を取り入

れて、西餅田系、種子島系、平佐系が形成され、来たるべき国際交流の時代を前に、白薩摩、黒薩摩、焼締陶器、磁器を擁する多様性豊かな焼物へと発展を遂げていたのである。

これらの中で、海外の人々の心を捉えたのは薩摩錦手であった。とはいえ、パリ万博においては、日本から参加した幕府、佐賀藩、薩摩藩のうち、幕府は全国の陶磁器を出品し、佐賀藩はほぼ全てが肥前磁器であった。こうした状況の下、薩摩焼はなぜ評価を獲得することができたのであろうか。それが偶然によるものか、あるいは薩摩藩による何らかの戦略があったのかについては、薩摩焼の歴史を紐解く上でも、幕末から明治期の日本陶磁器の国際展開を考える上でも重要な課題である。

ここに紹介した「錦手秋草文火入」は、その解明に大きな示唆を与えてくれた作品である。

パリ万博における薩摩藩の出品作は、イギリスのヴィクトリア&アルバート博物館に数点が所蔵されているほか、その後行われ

た万博の出品作も海外の美術館などの所蔵品を通じて把握することができるとは。しかしながら、藩主や上級士族向けに製作された御用品としての薩摩錦手の姿については、国内に編年の基準となり得る作例がほとんど残されていないことから、これまで明らかにされてこなかった。

平成三〇年（二〇一八）に鹿児島県歴史資料センター黎明館では、明治維新一五〇周年を記念した「華麗なる薩摩焼——万国博覧会の時代のきらめき——」が開催された。筆者はこの企画を担当したのを機に、御用品としての薩摩錦手の解明に取り組んだ。

その最も重要な発見が、割文様（連続文様）と秋草図で構成された「錦手秋草文火入」だったのである。本作は煙草盆の構成物で



錦手秋草文火入

— 一九世紀

鹿児島県歴史資料センター

黎明館蔵

（玉里島津家資料）

あり、当館に所蔵されている二万四〇〇〇点に及ぶ玉里島津家史料の中に含まれている。玉里島津家は、最後の藩主島津忠義の父として藩の実権を握った島津久光の家で、本家から受け継がれた史料も含まれる。この他、同家の数例と土佐藩山内家や白河藩阿部家といった大名家に伝来した作品を通じて、御用品としての薩摩錦手の姿が見えてきたのである。

こうして明らかになった御用品と万博出品作を比較したところ、共通する特徴と明らかかな差異があることが分かった。具体的には、素地・施釉法・釉調・絵柄の構図・描法は共通し、絵柄の華やかさ・器形・サイズには明らかかな違いが認められた。例えば、口縁部や裾に施される割文様と秋草図からなる絵柄の構図は共通するが、仕上げの華やかさは万博出品作が圧倒的であるとともに大型品が多い。

こうした比較検討の結果、パリ万博より以前に、御用品の薩摩錦手をより大型かつ華麗に発展させた輸出向けデザインと言える製品がすでに開発されており、それらが海外の嗜好を反映したが故に、他の日本の焼物に先立って海外で評価を受けたと結論づけることができたのである。

また、政治的視点から見ると、パリ万博の会場では、薩摩藩が独自の展示場を確保するという反幕的な行動をとったことにより、幕府と薩摩藩の政治闘争が万博会場を舞台に表面化、結果的に薩摩藩の存在感が大きく伸張し外交的勝利を取めた。この存在感により、薩摩焼はより一層のインパクトをもって迎えらえたのではなからうか。その意味でも、薩摩焼の国際評価は、薩摩藩の対外

戦略の成果とみることができよう。

続いて、当時の海外における評価が具体的にどのようなものであったのか見てみよう。キャプテン・F・プリンクレイは、一八六七年のパリ万博において「西洋の収集家が新しい視点を得たものの中で、一致した評価として最初に名前が挙がったのは薩摩焼であった」と記している^①。

また、西欧初の本格的な日本陶磁器研究書として知られる *Keramic Art of Japan* には、「日本のどの産地よりも繊細な芸術であり、花鳥などの題材で飾られた柔らかな色調の美しいファイアンスである」と同時に、「芸術的な観点で見れば、表面のヒビが優れた色彩装飾」であると記載され、買入に覆われた白薩摩独特の素地が評価されている^②。

さらにプリンクレイは、「それまで日本の陶磁器の唯一の評価対象とみなされていた『百花繚乱の磁器』は、(中略)実は魅力に溢れた数多くの陶磁器のごく一部であり、陶工たちの国の陶器やファイアンスは磁器よりも価値があることに気づくようになった」と記している^③。ここで言う磁器とは、伊万里焼(肥前磁器)であり、一七世紀後半からヨーロッパの王侯貴族に愛好されてきた既知の焼物であるとともに、すでに同地でも磁器製造が行われていた。それに対し、陶器の薩摩焼は新たな発見だったのである。

こうして、薩摩焼は一九世紀の日本を象徴する焼物として、「薩摩焼の作品が含まれなければ米国や欧州の東洋美術コレクションは完結しない」と言われるほどの地位を獲得するに至ったのである。とはいえ、そもそも薩摩錦手は御用品であったが故に生産規模

が小さく、世界的な需要に応えることは到底できなかった。その結果、鹿児島以外の土地で製造される「SATSUMA STYLE」薩摩様式」の製品が急速に発展を遂げた。この状況は、薩摩焼の国際的評価に大きな影を落とすことになるが、ともあれ、薩摩焼の海外需要は国内の陶磁器生産構造に影響を及ぼすほどの力強いものであった。こうした薩摩焼の海外需要をもたらしたのは、明治維新という社会構造の転換による、薩摩錦手の御用陶器から民需品への転換でもあった。

註

- (1) Frank Brinkley, *Japan, Its History, Art and Literature*, 1904.
- (2) Audsley and Bowses, *Keramic Art of Japan*, 1875.
- (3) 註(1)。
- (4) 註(1)。

鹿児島県歴史資料センター黎明館

【所在地】

〒892-0853 鹿児島市城山町7-2
電話099-222-5100 FAX099-222-5143
ホームページ<http://www.pref.kagoshima.jp/reimeikan/>
フェイスブック<https://www.facebook.com/reimeikan/>

【交通アクセス】

JR「鹿児島駅」、市電「バス」市役所前」または「水族館口」

【開館時間】

午前9時～午後6時(入館は午後5時30分まで)

【休館日】

月曜日(祝日の場合は翌日)、毎月25日(土日祝日の場合は開館)、年末年始

【常設展示観覧料】

大人310円 高・大学生190円 小・中学120円
10月1日以降
大人400円 高・大学生250円 小・中学150円
団体(20名以上)割引等あり、障害者無料

【催しの予定】

- ◆島津義弘没後400年記念展「戦国島津」10月1日(火)～11月4日(月)
- ◆企画展「武者姿とさつまの刀」開催中～10月27日(日)

▼令和元年、天皇即位関連で様々な祭祀・儀礼が行われます。10月の「即位礼正殿の儀」、11月の「大嘗祭」。新刊の『古代天皇祭祀・儀礼の史的研究』（22頁）は、天智天皇系皇統意識の見直しから古代天皇が関わる儀礼・祭祀を再検討します。また「大嘗祭」関連では、「儀式」「踐祚大嘗祭儀」の訓読・注釈『訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀』（同頁）が基礎史料として必読です。品切でした『日本古代即位儀礼史の研究』はオンデマンド版としてこの度復刊しました。せっかくなので、ぜひご検討くださいませ。（一）

☆学会出店情報

小社刊行図書を展示販売

※日付は小社の出店予定日

朝鮮学会(天理大学)	10 / 5 (土)・6 (日)
日本民俗学会(筑波大学)	10 / 12 (土)・13 (日)
日本史研究会(龍谷大学)	10 / 12 (土)・13 (日)
中古文学会(関西学院大学)	10 / 12 (土)・13 (日)
地方史研究協議会(同志社大学)	10 / 19 (土)・20 (日)
史学会(東京大学)	11 / 9 (土)・10 (日)
説話・伝承学会(同志社大学)	1 / 12 (日)

▼インタビュアーでは編者のお二人がとにかく楽しそうに語り合う様子が印象的でした。「これはオフレコで」という話も収録できれば、もっと刺激的な誌面になったのですが残念……。(M)
▼仕事柄、夜明けを迎える場合がある。実に夜が朝に変わる瞬間は美しい。急にすべてが明るくなる朝の到来のように、本もにわかに出来る上がる。(大)

▼待ちに待ったゲームが公開されたのに、手持ちの初代Padと四年前時点での型落ちスマホは対応していません。まだ使えるのですが……無念。(m)

▼憧れの京都での生活を始めて早数年。残暑の厳しさに苦しみながら紅葉を待ち遠しく思う日々です。(N)

▼ラグビーWC杯自国開催か。奮えます。生きている間に二度とないかも。闘球の魅力が広がると嬉しいな。(き)

▼表紙図版：韓国・芬皇寺石塔（向井佑介氏提供／『古代寺院史の研究』より）

『鴨東通信』は年2回（春・秋）刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信 No.109

2019（令和元）年9月20日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

https://www.shibunkaku.co.jp/

publishing/

表紙デザイン HON DESIGN

佐野真人（皇學館大学助教）著

古代天皇祭祀・儀礼の史的研究

10月刊行予定

A5判上製・四〇八頁／本体二、〇〇〇円

桓武天皇朝以降に見られるとされる天智天皇系皇統意識（新王朝意識）の見直しを出発点に、平安時代初期の桓武天皇朝・嵯峨天皇朝における儀礼の導入や整備、文徳天皇朝以降の儀礼の変遷や新たな儀礼の創出について考察を加えることで、平安時代前期を中心とした古代日本の儀礼秩序の構築過程の一端を明らかにする。

〔予定目次〕

序論 本書の視点

第1部 桓武天皇朝の皇統意識再考と儀礼の導入

第1章 桓武天皇と儀礼・祭祀 降誕から諸王時代／第2章 日本における昊天祭祀の受容／第3章 奈良時代に見られる郊祀の知識―天平三年の対策と聖武天皇即位に関連して―／第4章 山陵祭祀より見た皇統意識の再検討／第5章 古代日本の宗廟観―「宗廟」山陵―概念の再検討―／第6章 「不改常典」に関する覚書

第2部 古代正月儀礼の整備と変質

第7章 天地四方拝の受容―「礼記」思想の享受に関連して―／第8章 唐帝拝礼作法管見―「大唐開元礼」に見える「皇帝再拜又再拜」表記について―／第9章 「儀仗旗」に関する一考察／第10章 正月朝覲行幸成立の背景―東宮学士滋野貞主の学問的影響―／第11章 朝賀儀と天皇元服・立太子―清和天皇朝以降の朝賀儀を中心に―／第12章 延長七年元日朝賀儀の習礼―「醍醐天皇御記」・「吏部王記」に見る朝賀儀の断片―／第13章 小朝拝の成立／第14章 皇后拝賀儀礼と二宮大饗／結論 参考文献一覧

皇學館大学神道研究所編

訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀

〔儀式〕「踐祚大嘗祭儀上・中・下」の訓誦・注釈研究の成果

本体一五、〇〇〇円

中野渡俊治著

古代太上天皇の研究

奈良〜平安時代における太上天皇の地位の歴史的変遷を解明

本体五、四〇〇円

臈谷寿編

平安王朝の葬送―死・入棺・埋骨―

撰関院政期の天皇・貴族の葬送儀礼を通覧し、皇権の在り方を考察

本体三、七〇〇円

山中裕著

栄花物語・大鏡の研究

両書に内包される歴史書としての特徴や歴史的意義について論究

本体七、二〇〇円

倉本一宏（国際日本文化研究センター教授） 編

説話研究を拓く

— 説話文学と歴史史料の間に —

3月刊行

A5判上製・四五二頁／本体九、〇〇〇円

「目次」

第一部 説話と歴史史料

歴史叙述としての説話（小峯和明）
文学の側から読んだ公家日記―明月記の月（池上海）
『弘安源氏論義』をめぐる故実と物語（前田雅之）
京洛の境界線―文学古記録における平安京の内外認識（豊野）
高麗文宗が求めた医師（榎本渉）

第二部 説話の生成

「コノ話ハ蓋シ小石記ニ出シナラン」考―小石記と説話との間に（倉本一宏）
古今著聞集と文体―漢字文の混入と諸相―（野本東生）
紅梅殿の壺と編纂―説話集を中心として（藤本孝）
源隆国の才と説話集作者の資質をめぐる検証―研究史再考をかねて（荒木浩）
『宇治拾遺物語』の吉野地震伝承―大己貴命にさかのぼる―（保立道久）
和歌説話覚書（中村康夫）
足利安王・春王の日光山逃避伝説の生成過程（奥座勇）
新しい世界の神話 中世の始まり―（古橋信孝）

特集 説話の国際性

日本とベトナムの十二支の違い（ケン・ウー・クイン・ニー）
丁部領王の説話とベトナムのホアルー祭（ゴ・フォン・ラン）

倉本一宏著

『御堂関白記』の研究

長年先駆的な研究を深めてきた著者論文集

本体八、〇〇〇円



説話とは何か。まったくの創作でもなく古記録でもない、このつかみどころのない作品たちを解明すべく企図された国際日本文化研究センター共同研究の成果。

第三部 内在する歴史意識

『三国遺事』と『日本書紀』の観音説話について（宋流範）
ベトナムの『禪苑集英』における夢について（ケン・ティ・オウイン）
占城王妃の叙述をめぐる―越前幽霊集録および大越史記全書―から（佐野愛子）

称徳天皇と道鏡―古事談巻巻頭話考―（為尾和宏）
『長谷寺験記』編纂と下巻三十話の役割（内田淳子）
『拾遺往生伝』の歴史意識と文学意識（川上知里）
中世における説話集編者の歴史認識―古事談と古今著聞集―（松園斉）
『宝剣説話』を耕す―公武合体論の深層―（関幸彦）
戦国期の説話集―塵塚物語―（五味文彦）
歴史文学と多重所属者―慈光寺本『承久記』における三浦胤義について―（樋口大祐）
変貌する新田氏表象―足利庶流（足利門）と源家嫡流（非足利門）の間に―（谷口雄太）

第四部 説話の変容

日記と説話文学―円融院大井川御幸の場合―（伊東玉美）
武内宿禰伝承の展開―武内宿禰神格化の様相を中心に―（追塩千尋）
『鶯心集』連華城入水説話をめぐって（木下華子）
ヤマトタケル研究の新しい可能性―同性愛と性別越境の比較をめぐって―（井上章）
『夷堅志』のシラミと『古今著聞集』のシラミ（渡辺精）
新しく作られる歴史と神話（魯成煥）

吉川真司・倉本一宏編

日本の時空観の形成

日本の時空観の形成・定着過程を具体的に・実証的に明らかにする

本体二、五〇〇円

三浦俊介（立命館大学非常勤講師）著

神話文学の展開

— 貴船神社研究序説 —

6月刊行

A5判上製・四七六頁／本体二、〇〇〇円

古代日本の「記紀神話」、神社内で作成され管理されてきた「神社神話」、中世日本の各種資料に見える神話の異伝、毘沙門天が登場する「仏教神話」、そして中世神話「貴船の本地」などを多角的に論じる。神話を通して日本文学をより豊かに読み解く上で必読の一書。

橋本政宣・宇野日出生編

賀茂信仰の歴史と文化

〔神社史料研究会叢書VI〕

12月刊行予定

A5判上製・約二四〇頁／予価七、八〇〇円

山本信吉・東四柳史明編

社寺造営の政治史〔神社史料研究会叢書II〕

政治・経済的側面から、その歴史的意義と実態を明かす9篇

本体六、五〇〇円

園田稔・福原敏男編

祭礼と芸能の文化史〔神社史料研究会叢書III〕

祭場・舞台として繰り広げられる祭礼と芸能を特集した9篇

本体六、五〇〇円

第I部 貴船の神々と神話 第1章 神社神話の遡源 貴船神社の神話(1)／第2章 神社神話の降臨 貴船神社の神話(2)／第3章 神々の尻尾 神社名における「尾」の意味

第II部 古代中世の神話文学 第1章 記紀神話の構成 神話対照表を読む／第2章 中世神話と和歌 注釈書 藤原良経「天の戸を」

歌と天岩戸神話異伝／第3章 仏教神話の転生 四天王 吉祥天 女前生譚／第4章 仏教神話の軌跡 美女を救った技能者たち

第III部 中世神話「貴船の本地」論 第1章 鬼の名と「法華経」／第2章 転生再会の方法／第3章 地鎮の呪法 家を七七に造ること

／第4章 鬼を食う五節供／第5章 鬼殺しの年中行事 節分・門松・左義長／第6章 中世神話「貴船の本地」と貴船神社／補論 漢字「鬼」と和語「おに」についての基礎的考察

〔おもな内容〕 賀茂社祭神とその歴史の変遷（嵯峨井建）／建築

と祭儀から見た賀茂社本殿の意義（黒田龍二）／上賀茂神社競馬

会神事の儀式次第の変遷（山本宗尚）／賀茂御祖神社殿の変遷（京

條寛樹）／上賀茂社の忌子（森本ちづる）／鴨社古図（賀茂御祖神

棚町知彌・橋本政宣編

社家文事の地域史〔神社史料研究会叢書IV〕

社家における和歌・連歌等の文化活動に焦点をあてた10篇

本体七、五〇〇円

福山林繼・宇野日出生編

神社継承の制度史〔神社史料研究会叢書V〕

神社が継承されてきた諸問題を制度史の視点で論究した9篇

本体七、五〇〇円

工藤美和子（華頂短期大学教授）著

賢者の王国 愚者の浄土

—日本中世誓願の系譜—

4月刊行

A5判上製・二八〇頁／本体六、五〇〇円



工藤美和子著

平安期の願文と仏教的世界観（オンデマンド版）

願文の分析から、人々の仏教理解や信仰のあり方を考察

本体 七、四〇〇円

山田雄司著

崇徳院怨霊の研究（オンデマンド版）

日本史上最大の怨霊を細部にわたり検討し説明する

本体 六、四〇〇円

平安初期から院政期にかけて、みずからがもつ知識と財力によって理想の世界を実現する義務を負っている「賢者」としてふるまい、人々を悟りへと導こうとした文人貴族や撰閲家の有力者、天皇・上皇がいた。一方、中世初期には、人は仏の誓願の力によってしか救われない存在であると気づき、自らは「愚者」であると自覚した法然とその周辺の人々があらわれた。過去の「賢者」と「愚者」がそれぞれに構想していった理想世界を、彼らの誓いの言葉を通して追うことで、日本浄土思想史に新たな知見を示す。

第I部 賢者の王国

菅原道真の仏教信仰

「狂言綺語は讚仏乗の因とす」——勸学会とは何だったのか
院政——天皇と文人貴族たち

第II部 愚者の浄土

貞慶の『舍利講式』と『愚迷発心集』——愚かであること（一）

法然の語り——愚かであること（二）
法然の継承者たち

中井真孝著

法然上人絵伝の研究

法然上人絵伝研究を集大成した学界待望の論文集

本体 九、五〇〇円

森新之介著

撰閲院政期思想史研究

撰閲院政期における民衆仏教史観の実像を描き出す

本体 六、五〇〇円

大澤研一（大阪歴史博物館学芸課長）著

戦国・織豊期

大坂の都市史的研究

3月刊行

A5判上製・五八二頁／本体 一三、三〇〇円



文献をはじめこれまで未活用だった絵図や出土遺物の墨書など多彩な史料を駆使し、16～17世紀初頭にかけての都市大坂の変遷過程を具体的に実証し、都市史における意義を明らかにする。

新谷和之（近畿大学特任講師）著

戦国期六角氏権力と地域社会

A5判上製・三五二頁／本体 九、〇〇〇円



在地領主や惣村・寺社などの諸階層が織りなす近江の地域社会において、六角氏はどのようにしてその権力を維持できたのか。六角氏と地域社会をつなぐ人々の動きに着目し、城郭論や寺院論の成果も取り入れ、六角氏権力の歴史的な位置づけを問う。

植松清編著

大坂蔵屋敷の建築史的研究

蔵屋敷の変遷、建築構成・空間構成、居住性などを研究

本体 四、八〇〇円

石井伸夫・仁木宏編

守護所・戦国城下町の構造と社会

— 阿波国勝瑞 —

中世都市史研究を大きく前進させる一書

本体 六、六〇〇円

村井祐樹著

戦国大名佐々木六角氏の基礎研究

可能な限り一次史料を用い、基礎的事実を明らかにする

本体 二、六〇〇円

佐々木倫朗著

戦国期権力佐竹氏の研究「オンデマンド版」

東国に存在した政治権力の特徴を明らかにする

本体 六、一〇〇円

田島公（東京大学史料編纂所教授）編

禁裏・公家文庫研究 第七輯

12月刊行予定

B5判上製函入・約四〇〇頁／予価一五、〇〇〇円

これまで勅封のため全容が不明であった東山御文庫を中心に、近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の諸文庫収蔵本に関する論考・史料紹介・データベースを収載するシリーズの第七輯。【おもな収録予定史料】

『院中御湯殿上日記』（天正一十六年正月〜三月記、東山御文庫本標囊抄、宮内庁書陵部所蔵「定能卿記部類」三「行啓」・四「宮侍始并親王准后宣下記」・五「最勝講下」、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵「近衛家蔵書目録」、「高松宮家蔵書目録」など

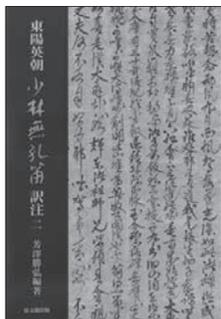
芳澤勝弘（花園大学国際禅学研究所顧問）編著

東陽英朝

少林無孔笛訳注(二)

7月刊行

A5判上製函入・六三六頁／本体一三、〇〇〇円



妙心寺派四派の一つ、聖澤派の開祖・東陽英朝禅師（1581-1646）の語録「少林無孔笛」六巻を現代語訳し、詳細な注を付す。晦渋な修辭が続く、難解で知られた「文字禅」の代表である語録を、禅学の大家が500年の歳時を超えて、現代に甦らせる。全三冊。

■全巻構成■

- 一（巻之一・巻之二 入寺法語）
- 二（巻之三・巻之四 仏事）
- 三（巻之五 偈頌、巻之六 像贊・道号） 2020年10月刊行予定

芳澤勝弘編著

江月宗玩 欠伸稿訳注 画賛篇

江戸前期の臨済宗僧侶・江月宗玩の語録「欠伸稿」の画賛翻刻

本体 八、〇〇〇円

酒井茂幸著

禁裏本歌書の蔵書史的研究

禁裏本の総体を蔵書群として捉え、その伝来の歴史を跡付ける

本体 五、六〇〇円

芳澤勝弘編著

雪叟紹立 雪叟詩集訓注

妙心寺派太平寺に住した禅僧雪叟紹立の詩文集を翻刻・訓読

本体 一五、〇〇〇円

大取一馬責任編集

中世歌書集（龍谷大学善本叢書31）

龍谷大学所蔵貴重書5点の典籍を選び、影印公刊（解説付）

本体 一三、三〇〇円

米家泰作（京都大学准教授）著

森と火の環境史

10月刊行予定

A5判上製・三八〇頁／本体七、五〇〇円

火を用いた人と環境との関わりとして焼畑をとらえ、焼畑の近世的展開と「進化」、土地制度史と焼畑、火と植生のポリティクス（政治）を問う。「人為の火」という観点から、日本の焼畑の歴史と地理と環境史を再考する試み。

〔予定目次〕

第I部 近世日本の焼畑と検地

- 第一章 紀伊山地における焼畑の展開と「進化」
- 第二章 出羽国村山郡におけるカノの展開と検地
- 第三章 太閤検地における山畑と焼畑
- 第四章 地方書にみる焼畑とその概念

第II部 近代日本の焼畑・植生・学知

- 第五章 近代日本の林学と焼畑像
- 第六章 近代林学と国土の植生管理
- 第七章 原野の火入れと学知のポリティクス
- 第八章 植民地朝鮮における焼畑と学知のポリティクス

岩本真一（大阪市立大学特任助教）著

近代日本の衣服産業

―姫路市藤本仕立店にみる展開―

9月刊行

A5判上製・三八四頁／本体七、〇〇〇円

兵庫県姫路市の小規模裁縫業者（藤本仕立店）の家文書を主な史料としながら、その創業から廃業までの姿を追った。戦時経済統制や他産地の動向など、時代の流れに翻弄された同家の実態を浮き彫りにすることで、新たな切り口から近代衣服産業の展開を描く。

〔予定目次〕

序章 本書の主題と藤本仕立店の概要

補論1 近代日本の衣服産業史

第I部 藤本仕立店の商品・生産・流通

- 第一章 生産体制と流通体制
- 第二章 取扱商品の主な形態―和服の商品化―
- 第三章 取扱商品の構成―多品種性の要因と意義―
- 補論2 近代代日本で商品化された衣服

第II部 戦時体制と衣服産業の再編

- 第四章 一九三〇年代までの販売圏の展開とその背景
- 第五章 戦時経済統制下の衣服産業
- 第六章 戦時経済統制下の藤本仕立店
- 補論3 第二海軍衣糧廠姫路本廠と生産組織
- 第七章 戦時経済統制下の業態と取引状況
- 第八章 資産の動向

終章 近代日本の衣服産業と藤本仕立店研究の意義

ジラルデッリ青木美由紀（美術史家）編

オスマン帝国と日本趣味 ／ ジャポニスム

10月刊行予定

A5判上製・三〇〇頁／本体六、五〇〇円

フランスを中心にジャポニスムが流行した時代、日本趣味の美術工芸品はアジアとヨーロッパにまたがるオスマン帝国の諸宮殿にももたらされ、宮廷を彩っていた。これらの品々はボスフォラス海峡に臨むイスタンブルの地に、どのような経緯で、いかにしてもたらされたのか？日本製あるいは外国製による日本趣味の美術工芸品を陶磁器・金工・刺繍・寄木細工等の専門家が現地調査した成果をもとに、草創期の日本・トルコの交流、そしてヨーロッパ周辺に及んだもうひとつのジャポニスムの諸相を明らかにする。

寺本敬子著

パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生

日仏両国の史料を駆使し、ジャポニスムの誕生を解き明かす
【好評3刷】

本体六、五〇〇円

佐野真由子編

万国博覧会と人間の歴史

多様な領域の研究者、政府・業界関係者らによる共同研究25篇

本体九、二〇〇円

【予定目次】

総論（ジラルデッリ青木美由紀）

ドルマバフチェ宮殿の寄木家具・横浜芝山漆器家具（金子皓彦）

ドルマバフチェ宮殿の「SATSUMA」（渡辺芳郎）

日本磁器の始まりとトルコの近代宮殿所蔵の有田磁器の特色（大橋康二）

「コラム1」万博を通じた日本工芸品の広がり——有田焼の場合（藤原友子）

ドルマバフチェ宮殿所蔵の日本製金工品（清水克朗）

「コラム2」トルコのコーヒー文化（ヤマンラール水野美奈子）

「コラム3」イスタンブルのジャポニスムとアール・ヌーヴォー（ジラルデッリ青木美由紀）

オスマン帝国の宮殿を彩った日本の刺繍（松原史）

「コラム4」東から西から——イスタンブル貴顕人名録（ジラルデッリ青木美由紀）

「コラム5」山田寅次郎——日本とトルコの友好の礎を築いた男（谷田有史）

近代オスマン宮廷の美意識と日本（ジラルデッリ青木美由紀）

索引

天貝義教著

応用美術思想導入の歴史

——ウィーン博参同より意匠条例制定まで——
本体七、五〇〇円

デザイン史フォーラム編

国際デザイン史——日本の意匠と東西交流——

豊富な挿図を掲載、日本と西洋諸国との交流を探る56篇

【5刷】
本体二、九〇〇円

校訂原本『古画備考』(全5巻)

来春刊行予定

A5判上製函入・総二、八〇〇頁／価格未定

◎東京藝術大学附属図書館蔵、朝岡興禎自筆の原本『古画備考』巻1〜48(嘉永3〜1850年起筆)および東京国立博物館蔵『古画備考』(図書寮印本)所載巻49〜51の全51巻を底本に、朝岡自筆の縮図、印章、署名等の画像とともに全翻刻、項目索引を付す。

◎太田謹増訂本(明治36〜1903年初版、大正元〜1912年校訂増補第二版、弘文館刊/昭和45〜1970年復刻、思文閣刊)と、その底本である東京国立博物館蔵本(図書寮印本)より校合を行いその校異を註に記載することで、江戸時代の『古画備考』および同時代の古画画研究の姿をより忠実に復元。現代の視点から、美術史のありかたを捉えなおす。



内容見本 (巻21下)

■研究代表者…玉蟲敏子(武蔵野美術大学教授)

■翻刻分担者…相澤正彦(成城大学教授)・五十嵐公一(大阪芸術大学教授)・井田太郎(近畿大学教授)・出光佐千子(青山学院大学准教授)・高橋真作(東京国立博物館研究員)・鶴岡明美(昭和女子大学准教授)・並木誠士(京都芸術大学准教授)・成澤勝嗣(早稲田大学准教授)・野口剛(津田塾大学准教授)・畑靖紀(九州国立博物館主任研究員)・本田光子(愛知県立芸術大学准教授)・宗像晋作(天分県立美術師範学校)・山口真理子(城西国際大学)・水田美穂(静嘉堂文庫美術館学芸員)・吉田恵理(静嘉堂文庫美術館学芸員)

■編集委員…北野良枝(元東京藝術大学助教)・玉蟲敏子・鶴岡明美

(以上50音順)

本研究および刊行にあたっては「江戸時代における書画情報」の総合的研究『古画備考』を中心として(第一期二〇〇三〜〇五年度、第二期二〇〇六〜〇八年度)科学研究費補助金(基盤研究B)および出光文化福祉財団の助成を受けています

各巻のおも内容

■第1巻 巻1 帝室天皇親王など(巻2・3) 延宝皇后(延宝など)(巻4・6) 武家江戸期までの武家徳川第十三代將軍まで(うち七代九代を除く)、大名など(巻7・10上) 釈門江戸期までの僧(巻10下) 松花堂流・松花堂昭乗とその門人

■第2巻 巻11 釈門黄樂画僧(應元・木庵・逸然・百拙など)・禅僧(心越・風外・白隱など)、その他近世画僧(古淵月傳など)(巻12上) 詩人画をよくした詩人(巻12下) 和歌・連俳・茶・香・進・画をよくした歌人・茶人など(巻13・20) 名画平安中期までの記録上の専門絵師、平安中期〜鎌倉初期の絵師や宮廷画人、鎌倉〜室町初期の画人(仏師、曾我派、阿弥派、雪舟とその門人など)

■第3巻 巻21・28 名画(室町後期)・桃山期の水墨画(逸伝画人、関東画人、雲谷派および雪舟末流、長谷川派、海北派、特定の画系に属さない画人、長崎画人、文人画家、天明〜寛政年間の画人(岡山虎政、三熊思孝、伊藤若冲など)(巻29・30) 名画(近世)文化年間の画人(吳春、長沢宣賢、野村石石、鈴木若翁など)、文政年間(の画人(岸駒、谷文晁、田能村竹田、渡辺華山、山本梅逸など)、『公益誌諸人名録序』二画要略)『山中人讀古』二画(『文川画譜』等)の写本

■第4巻 巻31 浮世絵師(伝)別筆・浮世絵師(巻32) 巨勢・大和絵の巨勢・宅間、住吉(下代)、芝、栗田口の各流派(巻33) 土佐家(土佐派)(巻34) 住吉堂(住吉如庵)、板谷派(巻35) 光悅流・光悅流(巻36・39) 狩野譜(中橋狩野家、鍛冶橋狩野家、木挽町狩野家、諸系(巻40) 狩野門人譜(狩野派の門人)

■第5巻 巻41・43 狩野門人譜(中橋狩野家、鍛冶橋狩野家、木挽町狩野家、駿河台狩野家、浜町狩野家の各門人)とその系譜(巻44) 英流(英一・蝶)以下の本流とその門人(巻45) 禁裏當部御所・大坂城・江戸城・松平寺院等の障壁画の面題や作者を記した様々な史料(朝鮮に贈った屏風資料など)(巻46) 二十四孝狩野家拾人寄合書(巻47) 禁裏當部御所・大坂城・江戸城・松平寺院等の障壁画の面題や作者を記した様々な史料(朝鮮に贈った屏風資料など)(巻47) 倣名目(『日本書紀』をはじめ物語・史書・歌集・随筆など)文献資料に言及された絵画制作者・組織・障子絵壁・屏風の種類や画題・描法など(巻48) 巻物画像(雑類)作品(分野別に障壁画・絵巻物・肖像画・部・仏画・禅道絵画・雑類)押し絵や鏤絵など(巻49) 長崎画人伝(別業、図書寮印本)渡辺秀実(鶴岡)著『長崎画人伝』荒木一(洲)著『続長崎画人伝』著者不明『來舶諸士』の3巻を収録(巻50) 高麗朝鮮画人伝(別業、図書寮印本)高麗朝鮮書画人伝(いろは順)

奈良国立博物館編

正倉院宝物に学ぶ2

四六判並製・三四八頁／本体二、五〇〇円

〔収録〕

2008～2010年正倉院学術シンポジウム「正倉院研究の現在」「皇室と正倉院宝物」「正倉院宝物はどこで作られたか」



日々、宝物の保存と修理に携わる宮内庁正倉院事務所の研究者をはじめ、東大寺・奈良国立博物館ゆかりの国内外の研究者が、正倉院宝物の様々な面を報告・討論するシンポジウム。

奈良国立博物館編

正倉院宝物に学ぶ3

11月刊行予定

四六判並製・三六四頁／本体三、〇〇〇円

木村法光著

正倉院宝物と古代の技

古代の匠が用いた技術が優れていた理由を探る永年の研究成果

本体一五、〇〇〇円

尾形充彦著

正倉院染織品の研究

研究職技官であった著者による正倉院染織品研究の集大成

本体二〇、〇〇〇円

〔収録〕

2011～2013年正倉院学術シンポジウム「正倉院のはじまりと国家珍宝帳」「正倉院宝物の近代」「鑑真和上と正倉院宝物」

米田該典著

正倉院の香薬―材質調査から保存へ―

有機物の「文化財」保存とは何かを問う先駆的な研究成果

本体一〇、〇〇〇円

近藤好和著

日本古代の武具―『国家珍宝帳』と正倉院の器仗―

正倉院の器仗（武具）を詳細に解説、多数の図版掲載

本体八、五〇〇円

園城寺の仏像 第四卷 鎌倉彫刻篇

A 4判上製・一九二頁・化粧函入／本体 一八、〇〇〇円

三井寺として親しまれている園城寺の開祖、智証大師の生誕二千年を記念して、園城寺および縁の寺に所蔵される仏像を網羅的に収録するシリーズ全五巻の第四巻。

秘仏・金色不動明王立像ほか鎌倉彫刻の粋を収録。図版はすべてカラー掲載。

◆内容目次

智証大師と不動明王

神戸大学名誉教授

百橋明穂

序 天台寺門宗管長 福家英明

図版

- 1 秘仏 重要文化財 金色不動明王立像（唐院大師堂安置）
- 2 重要文化財 吉祥天立像（唐院大師堂伝来）
- 3 重要文化財 訶梨帝母倚像（護法善神堂伝来）
- 4 愛子像（護法善神堂安置）
- 5 不動明王坐像（唐院長日護摩堂安置）
- 6 毘沙門天立像（金堂安置）
- 7 地藏菩薩坐像（小間地藏堂伝来）
- 8 毘沙門天立像（観音堂安置）
- 9 地藏菩薩坐像（法明院安置）

10 地藏菩薩坐像（近松寺善光寺堂伝来）

11 阿弥陀如来立像（光浄院位牌堂安置）

12 不動明王坐像（光浄院護摩堂安置）

13 菩薩坐像（微妙寺安置）

14 荼吉尼天騎狐像（光浄院護摩堂伝来）

15 天部坐像（唐院伝来）

16 阿弥陀如来立像（法明院安置）

17 不動明王及び両脇侍像（山上不動堂安置）

調書・解説

コラム 園城寺での美術工芸品実態調査（彫刻）

コラム 園城寺金銅仏の基礎的研究

— 蛍光X線分析を踏まえて —

論考

三井寺と女神像—園城寺の護法善神をめぐる—

高梨純次

藤岡 穰

寺島典人

佐々木進

【シリーズ案内】全5巻

第一巻 智証大師篇／第二巻 平安彫刻篇I

第三巻 平安彫刻篇II／第五巻 南北朝の桃山彫刻篇（未刊）



愛子像
（護法善神堂安置）

並木誠士（京都工芸繊維大学教授）編

近代京都の美術工芸

制作・流通・鑑賞

4月刊行

A5判上製・六〇八頁／本体二、〇〇〇円



明治・大正期の京都で制作・流通・鑑賞された
絵画、工芸、建築、庭園さらには定期刊行物や
書物など広範なジャンルをとりあげて論じるこ
とにより、近代京都の美術工芸をめぐる状況
を解明する。

第一部 制作

浅井忠とパリ―近代日本における芸術家の転身をめぐる考察（並木誠士）
木鳥櫻谷の写生縮模帖―近代京都における日本画の学習と制作（実方葉子）
太田喜二郎研究―その画業と生涯（植田彩芳子）
河井寛次郎と京焼の生産システム―登り窯を「受け継ぐ」意味（木立雅則）
京都における染織工芸の近代化―写し友禪・機械捺染・墨流し染（青木美保子）
水曜会をめぐる考察―竹内栖鳳塾における明治三〇年代後半の新動向（上田文）
「小美術」―その分析と西川一草亭の果たした役割（和田積希）
京都市立美術工芸学校の教育課程（松尾芳樹）

第二部 流通

美術貿易黎明期の京都とロンドン
―美術商池田清助とトーマス・J・ラーキン（山本真紗子）
谷口香嶠の横写と画譜出版（藤本真名美）

並木誠士・青木美保子編

京都近代美術工芸のネットワーク

ヒト・モノ・コトのネットワークから美術工芸の現場をあぶり出す
本体二、五〇〇円

ジャポニスム学会編

ジャポニスム入門

各国別の展開を読み解く、ジャポニスムの全体像に迫る基本図書
本体二、八〇〇円

第三部 鑑賞

雑誌『時事漫画 非美術画報』にみるカリカチュアと図案（前川志緒）
明治期京都における染色デザインへの展開―友禪協会応募図案を中心に（加茂瑞穂）
明治期京都における教育機関への海外デザインの導入
―図案集を中心として（岡達也）

第四部 鑑賞

小波魚青―戊辰之役之図―と明治維新観（高木博志）
雑誌にみる近代京都の美術工芸
―黒田天外の『日本美術と工芸』をめぐる（中尾優衣）
京都商品陳列所と明治末京都の美術工芸（三宅拓也）
土田麦僊の画室建設と材木商塩崎庄三郎（田島達也）
武徳殿の建設と国風イメーシの波及（中川理）
茶会の場の考察（矢ヶ崎善太郎）

デザイン史フォーラム編

アーツ・アンド・クラフツと日本

「生活」のための工芸運動を様々な視点から論じる
本体二、九〇〇円

竹内幸絵・難波功士編

広告の夜明け―大阪・萬年社コレクション研究―

萬年社の歴史的資料群から、日本広告業界黎明期の実態を写す
本体五、二〇〇円

伊勢物語絵研究会編

住吉如慶筆 伊勢物語絵巻

5月刊行

A4判上製・三三八頁／本体二七、六〇〇円

住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」(東京国立博物館所蔵)の概要(河田昌之) 図版篇

カラー図版

伊勢物語 各章段の概要(山本登朗)

詞書釈文(青木賜鶴子、泉紀子、田中まき)

絵巻場面を読む

(青木賜鶴子、赤澤真理、泉紀子、大口裕子、河田昌之、田中まき、山本登朗)

論考篇

住吉如慶の古画学習…「伊勢物語絵巻」と「年中行事絵巻」(大口裕子)

如慶の着想…絵画表現と料紙に施された金銀箔による装飾(河田昌之)

「伊勢物語絵巻」に描かれた建築空間…建築考証と貴族住宅像(赤澤真理)

「伊勢物語絵巻」にみる住吉如慶の復古的服飾表現(伊永陽子)

羽衣国際大学日本文化研究所 伊勢物語絵研究会編

宗達伊勢物語図色紙

59面全カラー・原寸大で掲載、全体像と特徴を明らかにする一書

本体 一九、〇〇〇円

河野元昭著

琳派響きあう美

琳派研究の集大成、芸術家たちの実像に迫る27篇

〔2刷〕

本体 九、〇〇〇円

〔内容見本〕



近世における伊勢物語絵の最高水準を示す作品とされる住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」(東京国立博物館蔵)。本書は、絵巻全体の構成や場面解説および解釈の最新研究成果を提示し、絵画史、国文学のみならず歴史学や住宅建築史、さらには文化史や服飾史などの幅広い視点から、如慶が描く伊勢物語絵の魅力に迫る。

島尾新・彬子女王・亀田和子編

写しの力ー創造と継承のマトリクスー

日本美術における模写の伝統を様々な角度から再検討する試み

本体 四、〇〇〇円

冷泉為人著

円山応挙論

美術史研究者としての50年にわたる日本近世絵画研究の集大成

〔2刷〕

本体 九五〇〇円

小山聡子（二松学舎大学教授）
松本健太郎（二松学舎大学准教授） 編

二松学舎大学学術叢書

幽霊の歴史文化学

本来目に見えない幽霊を人びとはどう感知し、それを表象するためにいかなる工夫をしてきたのか、幽霊になにを求めたのか。歴史学、メディア学、文学、美術史学、宗教学、社会学、民俗学等さまざまな研究分野から日本人の精神世界の一端に迫る。

好評増刷

四六判上製・三四四頁／本体二、五〇〇円



第一部 幽霊の存在論―それはどう生起するの

生と死の間―靈魂の観点から―(山田雄司)

幽霊ではなかった幽霊―古代・中世における実像―(小山聡子)

死霊表象の胚胎―記紀万葉集を中心に―(松井健人)

第二部 幽霊の表現論―それはどう描かれるのか

化物振舞―松平南海侯の化物道楽―(近藤瑞木)

『新釈四谷怪談』のお岩が映したすもの

―占領期の日本映画検閲と田中絹代のスタイイメージをめぐる―(鈴木潤)

祟りきれない老婆と猫―中川信夫「亡霊怪猫屋敷」のモダニティ―(山口直孝)

幽霊とゾンビ、その相反するもの―肉体と靈魂の関係性と価値観の伝播について―(岡本健)

子見者・反逆者・哲学者―大塚睦の幽霊―(足立元)

第三部 幽霊の空間論―それはどこに出没するの

上から出る幽霊―地上七・八尺の異界―(山本陽子)

立ち現れる神霊―御嶽講の御座儀礼―(小林奈央子)

大都市江戸の怪異譚―耳袋と反古のうらがきから―(内田忠賢)

デジタル時代の幽霊表象―監視カメラが自動的／機械的に捕捉した幽霊動画を題材に―(松本健太郎)

現代社会の幽霊―ポスト的読解―ホラー映画の表象とメディアの物質性(テリアリテ)―(遠藤英樹)

八反裕太郎（穎川美術館学芸員） 著

描かれた祇園祭

―山鉾巡行・ねりもの研究―

A5判上製・九七〇頁／本体一五、〇〇〇円



祇園祭の山鉾巡行ならびに江戸中期に始まる神輿洗のねりもの(芸妓による仮装行列)を描いた絵画作品から、その祭儀の変遷を読み解く試み。

第14回林屋辰三郎藝能史研究奨励賞受賞

2019年冬〜2020年春 主な刊行予定

大航海時代の東アジア海域と琉球

―レキオスを求めて―(仮)

中島楽章著

住友史料叢書 34 年々諸用留13

住友史料館編

彩られた紙(仮)

四辻秀紀著

廣瀬千紗子著作集(仮)

廣瀬千紗子著

前近代日本における

病氣治療と呪術の研究(仮)

小山聡子編

月次祭礼図屏風の復元(仮)

岩永てるみ・阪野智啓・高岸輝・小島道裕編

絵で見る奈良絵本・絵巻事典(仮)

石川透編著

韓国陶磁史の誕生と古陶磁ブーム

鄭銀珍著

祇園祭(仮)

京都文化博物館企画・編集

竹内栖鳳

水墨風景画にみる画境

藤木晶子著

儀礼・象徴・意思決定

―日欧の古代・中世書字文化―(仮)

河内祥輔、小口雅史、M・メルジオヴスキ、E・ヴィッター編

貴族日記が描く京の災害(仮)

片平博文著

京都大学史料叢書

兵範記(四)・範囲記・知信記

京都大学文学部日本史研究室編

図説 内国勸業博覧会(仮)

橋爪紳也著

思文閣グループの
逸品紹介

美の縁



✧ 《空間概念—期待》 Lucio Fontana

《空間概念—期待》というタイトルが付けられたル
ーチョ・フォンタナの「切り裂き」シリーズは、一九
五八年から最晩年の一九六八年まで制作された、彼の
中でも最大のシリーズである。

フォンタナは、《空間概念》と題された作品につい
て語るとき、しばしば「無」という表現を使う。《空
間概念》のシリーズにおける「穴」や「切り裂き」は「無
の形」の表現であり、それによって「無」に何らかの
価値を与えようとした、とも語る。

彼にとつての「無」とは破壊ではなく創造の無であ
り、万物の根源としての無でもある。すなわち、切り
裂かれた空間は、虚無的なそれではなく、無限性を持
ちながら原初的にかつ創造的な「期待」をはらむ次元
の表現でもある。

この感覚には、「禪」の思想と通底するものがある。
禅における「円相」とは、始まりも終わりも無い究極
の形とされる。それは、無限の宇宙の姿であり、真理
の象徴ともされる。フォンタナは、支持体を破ること
で、それまでの制限された世界からの解放と、無限の
次元への誘いという画期的な表現に到達した。

地域や時代は全く違えど、表現の可能性を突き詰め
ていった先に、ある種の共感を覚える到達点を見出す
ことは非常に興味深い。



我々思文閣は日本の優れた文化を
育み、伝え、広める事により一人でも多くの人々に
感動と豊かな心を与え続ける企業を目指します。

SHIBUNKAKU
思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL (075) 531-0001 FAX(075)531-5533
<https://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録



今上天皇御即位礼絵巻 二巻
今上天皇大嘗祭絵巻

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・
錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております
(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い
合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL (075) 752-0005 FAX(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp

思文閣 査定申込みアプリ

お手持ちのスマートフォン・タブレットで簡単に査定申込みができます。
「お宝鑑定!思文閣-美術品査定申込」アプリをリニューアルいたしました。



- 画面をシンプルに見やすく改良いたしました。
- 撮影が子供の写りを追加実装いたしました。
- 古文書は印刷物や写真の両方でお使いいただけます
ようになりました。
- ※お宝鑑定をお使いの方は、iOS版の新規ダウン
ロードをお願いします。



「思文閣」で検索、無料ダウンロード

SHIBUNKAKU
思文閣



ぎやらしい思文閣では、絵画・陶芸など
様々な展示会を開催いたします。
皆様のお越しを心よりお待ちしております。

ぎやらしい思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町386
TEL (075) 761-0001 gallery@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/gallery/